樋水龍神縁起　第四部　春、青龍

八少女夕

Author : Yu Yaotome
Copyright@ 2013 Yu Yaotome

目次

時過ぎて
春風駘蕩
コアトリクエ
『鬼』
味到
疑惑
青龍時鐘
新しいボトル
和解
去年の春

時過ぎて

桜が舞う。龍王の池の東には、見事な八重桜があって、それが毎年素晴らしい花を咲かせるのだ。二本の樹がお互いに絡み合うようにねじれて途中からひとつになっているので、夫婦桜と呼ばれていた。その花は、水面に反射されて、まるで花が二倍咲いたかのように華やかな様相を見せた。

このピンクには見覚えがある、と摩利子は思った。ああそうだ、ゆりさんを覆っているあのオーラの色だ。明るく華やかな薔薇色。だが、摩利子はしばらくこの華やかな薔薇色の輝きを見ていなかった。

大きな転機となったのは、例の『龍の媾合（みとあたい）』から三ヶ月くらい経った冬の日のことだった。摩利子と一は二人でランチタイムの片付けをしていた。突然、ゆりが店に入って来た。様子がおかしいのは一目で分かった。青ざめてカウンターに座ると震えて泣き出した。摩利子は一と顔を見合わせるとすぐにゆりの側に来て肩に手を置いて訊いた。

「どうしたの。ゆりさん。出雲の産婦人科に行って来たんでしょう。何かあったの？」

「人間じゃ、ない……」

その時に、摩利子の前にゆりの忘れられない光景が『ヴィジョン』として現れた。それは産婦人科の診察室だった。超音波エコーの機械のディスプレイを医者がゆりの方に向ける。説明しながらお腹の中にいる胎児を見せる。『それ』は小さくてはじめはよく形がわからなかったが、カメラが動くと、不意に横からはっきりとした形をみせた。見慣れた人間の胎児の形ではなかった。タツノオトシゴに長いしっぽがついたみたいな……。

ゆりは自分の目が信じられなかったが、それは医者も同じだった。何かの間違いではないかと胎内カメラを動かした上、印刷ボタンを押したがその途端、超音波エコーが煙をあげて壊れてしまった。医者は首を傾げたがエコーが壊れてはどうしようもないので、一週間くらいしたら再び予約を取り直してくれるように頼んで、その日の診察を終えた。

だが、ゆりにはわかっていた。エコーが壊れたのは偶然ではない。お腹の中にいる『それ』は、写真を撮らせたくなかったのだ。ゆりはバスが樋水村に着くまでじっと涙をこらえていた。だが、『たかはし』の前まで来たら、もう我慢ができなくなった。どうしていいかわからなかった。

「どうして？　本当にどうしてこんなことになったのかわからない。でも、きっと朗さんには信じてもらえない。どうしたらいい？」

号泣するゆりを摩利子はただ抱きしめた。一は摩利子に目配せするとそっと出て行き、しばらくすると朗を連れて戻って来た。朗は摩利子に頷いて代わってもらうと、黙ってゆりを抱きしめた。ゆりは驚いたが朗はゆりを離さなかった。そのままゆりが落ち着くまでじっとゆりの背中をなでていた。

「心配しなくていい。君を疑ったりなんかしていない。あれはあの『龍の媾合』でおこったんだ」

春風駘蕩

私は現実主義だ、夢見がちな方ではない。そう摩利子は思った。神なんか信じていないし、極楽とか地獄とかも信じていない。神主である新堂さんだって信じていないんだから、私がそのことで責められる筋合いはないはずだ。

龍は見えるんだから、なんかの事実の類いだとしても、ゆりさんが人じゃない何かを身籠ったなんてことは最初は信じられなかった。もちろん『ヴィジョン』でゆりさんが医者の所で見た超音波エコーに映っていたものは見た。人間には全く見えなかったけれど、それでもしばらくは目の錯覚かなんかだと思っていた。

いまはさすがの私でも、氣のせいとはいいきれない。人間が二年半も生まれないはずはない。ゆりさんはすっかり変わってしまった。すくなくとも姿形は、あの美しい千年祭の媛巫女と同一人物とは思えない。顔はまだいい。あのくらいふくよかな人ならどこにでもいる。京都の笠宮神社であった、あの宮司の奥さんと変わらないくらいだ。絶壁と言ってもよかった胸は、Fカップが自慢の私と変わらないくらいになったから、そんなに憂れうることでもないのかもしれない。でも、問題は下半身だ。ああいうのはどこかで見た。ああ、そうだ。映画の『スターウォーズ』のなんとかハットっていう悪の親玉。そういったら言い過ぎかしら。人間の下半身があんな風になるなんてこの目で見なければとても信じられない。でも、ゆりさんは太りだした時からすごく氣にして、一生懸命泳いでいた。でも、二年半だもの。どうしようもなかったに違いない。

ここ半年くらいはもうまともに歩けなくて、いつも家に居る。宮司が箝口令をひいて、誰にも知られないようにしているからこの村の中でも知らない人がいる。病氣かなんかで人前に出られなくなったということになっているみたいだ。私と一は時々訪ねに行っている。宮司もそれまでは禁止できないみたい。まともに家事ができなくなってからは、次郎さんが半ば家政婦のようにしているらしい。まあ、あの人は「媛巫女さま命」だから、あんなに痛々しいゆりさんの世話でも嬉々とできるんだろう。

変わったのは肉体だけじゃない。あんな状況になったら平静を保てと言っても無理だと思う。ゆりさんは涙もろく、精神不安定だ。家事ができないことに後ろめたさを持ち、どうでもいいことでもすぐに傷つき、人に会うのを怖がっている。

新堂さんは時折うちの店にやってくる。大した精神力だといつも感心する。自分の妻が二年半もこの世のものではない何かを身籠っていて、いつどうなるのかわからないのに、黙々と日常の仕事をこなしている。文句も言わずに。私だったら暴れているだろうし、一なら泣き言を並べているだろう。

いったい、この樋水ってのはどういうところなんだろう。どうしてこんな変な事ばかり起こるんだろう。千年前の恋人同士とか、龍王の媛巫女とか、憑霊祓いとか、千年祭とか、人間じゃないものを妊娠とか、どうしてあの二人にばかり。みんな必要ない事なのだと思う。あの二人は、ああいう妙な事がなくても、ごく普通の素晴らしい夫婦なのだ。なぜあんな訳の分からない事にばかり巻き込まれているんだろう。あの『龍の媾合』にはそりゃ、いい思いはさせてもらったけれど。

『たかはし』の経営はまずまずだった。摩利子は毎朝、一が珈琲を挽く

音で目が覚める。一のこだわりはほとんどそれだけだった。村の人びと、前夜『三ちゃんの店』で遅くまでカラオケで騒いでいた人たちが、目をこすりながら入ってくる。一はコーヒーを淹れて、トーストとミニサラダとゆで卵のモーニングセットを出す。たまに三造さん本人もやってくる。

摩利子が降りてくると、一は摩利子にコーヒーを淹れてやる。一のコーヒーは天下一品だ。そして村人達のうわさ話に耳を傾ける。ここにいれば、村で起きたことのほとんどは知ることが出来る。勾玉磨き職人の吉田玄さんの奥さんが出雲で違反切符を切られた話も、お社の次郎さんがまたしても女の子にふられた話も、摩利子は半分眠った頭の片隅に、コーヒーの湯氣とともに吸い込んだ。幸い、ゆりの秘密は噂になっていなかった。

(まあ、知られたとしても、ここの人たちはよそ者には口が堅いけれど……)

だいたいのうわさ話を聞き終えると、摩利子は昼の準備に入る。『たかはし』のランチセットはすでに何度かガイドブックに載り、樋水龍王神社を訪ねる観光客が毎日やって来た。前オーナーの高橋勝にとってこの喫茶店経営は地主業の片手間の趣味みたいなものだったが、このランチの成功で摩利子と一は『たかはし』だけでなんとか食べられるようになっていた。

夜は、だから二人の余力でやっているようなものだった。ただし、これは摩利子の一番腕の見せ所で、質の良い多少手の込んだ料理を美しい都会的なビジュアルで提供し、多少高価なお酒と静かな雰囲氣を楽しめるようにしていた。村人にはもともとこういう店にくる習慣がなかったのだが、比較的裕福でレベルの高い会話をしたがる人たちが定期的に訪れるようになっていて、これも成功したと言ってよかった。彼らはかなり高いお酒を飲んでくれるのだ。

摩利子は店に必ず季節の花を飾るようにしていた。東京にいれば、季節の花は何かと考えなければならなかっただろうが、ここにいればそのようなことを考える必要はなかった。何がいま咲くのか、家から一歩出れば一目瞭然だったからである。次郎がときおりお社から花を持って来てくれた。今はもちろん大振りな桜の枝が飾ってあった。

摩利子の生活はこの四年で大きく変わっていた。東京の仲間が時々訪ねて来ては摩利子の変わり様に驚きの声を挙げる。摩利子の見かけはほとんど変わっていないけれど、考え方の変化、自然への理解、都会的な物への執着の消滅は彼らには簡単には信じられないことだった。

摩利子は一との生活にとても満足していた。最初はそのうちに東京が恋しくなって別れたくなるんじゃないかと心配したが全くの杞憂だった。一は摩利子を全く束縛しなかった。摩利子が大阪に買い物に行くと言えばニコニコして送り出してくれた。山のような買い物袋を抱えて帰ってくると、その戦利品を楽しそうに見て

「きれいだね。摩利ちゃん」

と、自分のことのように喜んだ。一の洋服の趣味には全く我慢がならなかったので、摩利子が買って来たが、どうも高価なブランド物よりも安物の方ばかり着たがるので、安物でもデザインや色に納得のいく物を摩利子が厳選した。

都会の仲間も、一も全く氣づかなかった一番大きな摩利子の変化

は、人に対する摩利子の考え方だった。かつての摩利子は「この人は何が出来るか」で人を判断していた。学業の成績、仕事の能力、経済的な自由、社会的地位などはとても重要だった。さらに『見える者』と『見えない者』の違いもとても重要だった。そもそも摩利子は長いこと本当に『見える者』と会ったことがなかった。「金縛りに遭う」とか「霊が見える」という人は何人かいたが、摩利子の見えているものとは違うようだった。

摩利子は自分から『見える』ことを人にはいわなかった。何も言わなかったのに摩利子が『見える者』だとはっきり指摘したのは新堂朗がはじめてだった。彼は初対面の摩利子の目の動き、見ている方向でそれをすぐに見破ったのである。ということは彼が『見える者』である証拠でもあった。

いずれにせよ、かつての摩利子は『見える者』が『見えない者』より格が上であるかのように考えていた。

高橋一に出会って以来、摩利子の周りは『見える者』だらけになってしまった。新堂朗とゆりにはじまり、一の伯父の勝、武内宮司、次郎、さらに『三ちゃんの店』の三造まで『見える者』だった。住民の四分の一が『見える者』という異常な村なのである。

しかし、それはただの違いに過ぎなかった。高橋一は『見えない者』だったが、それは一の価値をまったく下げはしなかった。例えば、摩利子は一の体調の変化をオーラの色で即座に感じ取ったが、一は摩利子の体調の変化を顔色で感じ取った。摩利子は初対面の人間が信用できる人かどうかを頭頂のオーラで判断したが、一はその人の話し方や目つきで判断した。摩利子には『ヴィジョン』が見えて、その人のトラウマやショックを映像として感じ取ることが出来たが、それは摩利子自身にも相手にもたいして役に立つことではなかった。少なくとも余計なことはいわずに済む、その程度の利点にしかならなかった。

新堂朗や武内宮司、笠宮神社の峯岸宮司、それに朗の父親の新堂和尚などは『祓える者』だった。ゆりにはそれは出来なかったが、石の中に精霊や『禍々しいもの』を閉じ込め、朗の祓いに協力することが出来た。こういう特殊な力があれば、それは何かの役に立つだろうし、彼らはそれをわかって自分の職業にしていた。だがそうでなければ、例えば三造のように

「昨日、龍王様がごじゃった」

とうわさ話をするだけでは、その人の価値をあげもしないし下げもしないのである。

笠宮神社の宮司の妻牧子、高橋一など『見えない者』が、自分をはじめとする『見える者』よりもずっと深く人間を知ることが出来るのにも摩利子は多くを学んだ。つまり、『見える者』であるかどうか自体は本当にどうでもいいことだと摩利子はこの数年でようやく悟ったのである。

同時に、それ以外の人を見る目も変わった。かつては六本木ヒルズのＶＩＰルームに出入りする男は、駅前の立ち食いそばで働く店員より男として上等だと思っていた。けれどそれもまた幻想だった。仕事の能力や持っている財産の額は、時には人間としてのヴァイタリティを判断するバロメーターにはなる。けれど実際に人間として上等かどうかは、それだけではわからない。実際につきあってみなくては判断できないのだ。そして東京にいる人間が、田舎にいる人間より優秀な

わけではなかった。確かにあれだけ人口があれば優秀な人間の総数が多いのは確かだが、だからといって全員ではないのだ。

摩利子はこの村には自分が人生で出会った敵いっこないと思う優秀な人間の半数がいると思った。その全員が好きなわけではなかったが、優秀なことには間違いなかった。

一という人生の伴侶と暮らし、日々『たかはし』で客と会話を交わし、経営のために村役場や神社とわたりあい、家族として高橋家とつきあい、友人として朗やゆりと共にいて、摩利子の人生に対する姿勢はどんどん変わって来た。

そこへ時々やってくる東京時代の仲間達の会話はとても幼稚で薄っぺらくさえ思った。それは地面に足がついていない発言ばかりだった。しかも、そんな会話こそ、かつて摩利子がもっとも愛していたものだったのである。

信じられないことだが、摩利子はここでの一との生活をかけがえのないものと思うようになっていた。今、一が東京に行くなどと言い出したら大騒ぎして抵抗するだろう。

摩利子は樋水で三度目の春を多いに楽しんでいた。雪が融け、樋水川が猛烈な勢いで流れ出すと、とたんに生命が大急ぎで息吹きだす。その力強いパワーを見るのが何よりも好きだった。自然が、生命がどれほどの再生の力を隠していたのか、春は摩利子に見せつける。冬の間に、ずっと籠っていた内側へのエネルギーは、一氣に外へと爆発しだす。樹々が若葉を萌えたたせる。若緑の炎が燃え移ったかのように山全体を覆い尽くす。桃色、山吹色、すみれ色、水色、桜色、緋色の花が呼応するがごとく、開いてゆく。森が輝き、水が光る。風が薫りを携えながら里へと清浄なる樋水の歓びに満ちた氣を送り届ける。摩利子もお氣に入りのひわ色のパンプスを解禁にして、樋水村を闊歩する。

コアトリクエ

朗は大学生の頃、メキシコに旅をしたことがある。その時に博物館で見たコアトリクエの像をいまでも憶えていた。頭部がなく、胴が異様に短く、しゃれこうべを胸に飾り、蛇模様のスカートをはいた鬼氣迫るものだった。そこには通常見られる母性や女性に対する愛情や憧憬は全く見られず、残酷な醜さだけが強調されていた。コアトリクエすなわち「蛇を腰に巻き付けた女」は、アステカのあらゆる神々の母であった。ある時、山で羽毛の珠を拾ったことにより不思議な受胎し、太陽神ウィツィロポチトリを産むことになった。その神話はなんら醜いものではないのに、その像は恐ろしくおぞましかった。

メキシコの神話には全体的にそのような不氣味さがあった。冥闇で、残酷さをはらんでいる。我が子に母乳の代わりに生き血を飲ませる母、母親を殺そうと企む月の女神、その姉を生まれてすぐに殺す太陽の軍神。救いのない黒い世界が、愛と豊穣と至福を望む人々の心の底に熾っている。敬虔なカトリックを装いながら、人びとはこれらの暗闇の神々に心を捧げている。闇の陶酔と死の狂躁が彼らの心をしっかりと掴んでいる。

ゆりの変わり果てた体を目にする時、朗の脳裡に浮かぶのはそのコアトリクエの象徴する世界だった。かつて、メキシコでも蛇神が女に望まぬ妊娠をさせたのかもしれない。ポリネシアにはあちこちに蛇やウナギによって妊娠させられた女の神話があるし、日本にも三輪の神に魅入られて蛇の袋を生む女の話が残っている。その話を聞いた時には、どれも単なる象徴の話だと思っていた。

実際にそうなのかもしれない。ゆりの体におこったことは、この世でごく普通に我々が経験することの象徴なのかもしれなかった。穢れなき媛巫女はもうどこにもいない。たった一本の矢で命を奪われた瑠璃媛は美しいまま春昌の前から姿を消したが、一人の女と平穏に添い遂げるならば、美や愛だけでは語り尽くせない。人びとの幻滅はごくゆっくりとおこり、これほどダイナミックにはおこらない。だが、それでも結果は同じだ。

それは女にだけではなく男にも平等に起こる。腹が出て、肌が弛む。しわがより、腰が曲がる。髪は白くなるか失われる。醜く歯が抜け、悪臭を漂わせやがて棺桶の中に横たわる。聖なる媛巫女と力みなぎる陰陽師の抱擁は、いずれはそうして老いさらばえた二人の介助に姿を変える。そしていずれは再び死が口を開けてそれを飲み込むのだ。

朗は間違いなくゆりの体に幻滅をおぼえていた。ゆりの卑屈な物言いやヒステリックな反応にも疲れていた。だが、ゆりと共にいるのは義務や憐憫だけからではなかった。彼女を救いたかったが、どうすればいいのかわからなかった。

努力と意志で人生を斬り拓いて来た朗は、どうすればいいのかわからないことなどこれまでほとんどなかった。目標を設置しそれに向かって精進する、それだけで全てが上手くいった。だが、今回だけはどうしてもうまくいかなかった。前向きになるような言葉をかけても、楽になるように手助けをしても、ゆりは傷つき悲しみ迷うばかりだった。

ゆりの不安もよくわかった。誰もそんなお産をしたことはない。神話での半人半獣の出産ときたらどれも生還など無理な状況ばかりだ。

標準的なサイズの赤ん坊を産むのすらあれほど苦痛が伴うらしいのに、あのサイズの何かを産むことなど可能なのかもわからない。朗は、龍王がゆりをたった一度の使い捨てにしないことを願った。

ゆりの体の中で育っているものが何なのかは朗にはわからなかった。単純な人間の子供でないということ以外は確かなことは何もなかった。それを明らかにした所で誰の役にも立たない。なぜ、ゆりにだけそれが起こったのかということに対する答えも出なかった。

千年にわたり、綿々と行われてきた『龍の媾合』の神事で『妹神代』が妊娠したという記録はなかった。むしろこの二職についた夫婦は揃いも揃って子宝に恵まれなかった。武内宮司と亡くなった妻も、その前の宮司も長い結婚生活でたった一人の子供も生まれなかった。

「千年の願満つる」

例の千年祭の時に、最後の神託はそう告げた。水晶から出た龍王がそのまま瀧に戻らずに朗の体を通って行ったことを、武内宮司は指摘した。朗と武内宮司は『龍の媾合』について話をした。ほとんどは武内宮司が生涯に三度経験したものと同じだったが、最後の感覚だけが違っていた。それが龍の射精だったのではないかと宮司は言った。

龍が子孫を残すのに、ただの人間二人の肉体を借りなければならないとは、朗には納得がいかなかった。勝手に龍同士で子づくりをすればいいのに、そう思った。龍とは河の別の姿だ。子づくりをするということは、どこか新しい河が生まれるということのようにも思われる。自然現象としては別に珍しいことには思えないし、人の体を必要とすることにも思えない。

だが、それで済ませるには、現在自分達夫婦に起こっていることは、あまりにも理不尽だった。

もともと龍王が必要としているのはゆりだけだと朗は信じ込んでいた。だが、実際はそうではなかった。『龍の媾合』には背と妹の二人の神代が必要だった。

龍王はもしかしたら千年前に瑠璃媛にも同じ妊娠をさせるつもりだったのかもしれない。瑠璃媛にはまだ夫がなかった。春昌は全く招かれざる客のつもりでいたが、もしかしたら龍王は春昌を待っていたのかもしれなかった。もし、瑠璃媛が望んだように、春昌が樋水にとどまったなら、今と同じことが起きていたのかもしれない。朗が千年にわたり瑠璃媛を忘れられなかったことも、父親の寺を継がずに神職になることを選んだのも、すべて朗にその役目を果たさせるためだったのかもしれない。ゆりの腹の中にいる、あの黄金の光を放つものを生み出すために、なとんいう氣の長い計画を立てるのだろう。

人間にとって千年という時間は永遠といってもいいほどだったが、龍、つまり自然にとってはほんの一瞬なのかもしれない。それと同時に人間が笑い、泣き、成長し、誰かを愛し、憎み、忘れてゆくのもどうでもいいことなのかもしれなかった。

だが、それは朗にとってはどうでもいいことではなかった。

『鬼』

高橋勝は『たかはし』のカウンターに座って、忙しく立ち回る摩利子と一を満足そうに見ていた。一は子供のいない勝の一番のお氣に入りの甥っ子だった。小さい一に川で鮎釣りを教えたのも、龍王の池で舟遊びをさせたのも勝だった。

勝は宮司武内信二の竹馬の友だった。同じ小学校で机を並べていたし、一緒に出雲の中学にも通った。

樋水村の地主として代々氏子の代表である総代を務めて来た高橋家は樋水龍王神社と密接に関わって来た。子供の頃に信二と勝が遊んだのもお社の境内だった。『見える者』である勝は信二と一緒に龍王の姿を眺めて育った。

母親が、予定日よりも二日早く、二月一日に勝を産んだ時に、父親は涙を流して喜んだという。何がそんなに嬉しいのかわからないという県外から嫁いで来た母親に父親は言った。

「この子は七赤金星の生まれだ。『鬼』にならずに済むんだよ」

武内信二はそれより半年遅れて生を受けた。やはり代々総代を務める武内家は覚悟を決めた。この年にこの村で産まれた六白金星の男の子はたった一人だった。中学を卒業すると、当然のように信二はお社に引き取られ、出仕になった。なぜという問いは許されなかった。樋水龍王神社の神職は六白金星の者に限られている。この村で六白生まれの男子は覚悟をしなくてはならなかった。先代の宮司は信二を特に熱心に教育し、早くに神職にした。結婚にも宮司が口を出し、見合いで県外から九つ歳上の娘を見つけて来た。武内良子は『妹神代』のことなど何も知らずに嫁いだのだった。

良子は特に恋愛結婚を望んでいたわけではなかった。当時はごく普通だった相手もよく知らないままの結婚を当たり前のように受け入れた。田舎とはいえ由緒ある神社の神主で、将来的には宮司になる人と聞かされていた。

武内信二は良子につらくあたったわけではない。暴力を振るったことなどもなかったし、生活に苦労させることもなかった。たが良子は幸せではなかった。武内は承知しなかったが、離婚を望み何度も実家に戻った。

『龍の媾合』が辛いというのは表面的な理由の一つに過ぎなかった。一番の理由は信二に妻として人間として扱われていないという不満だった。信二にとって大切なのは龍王と媛巫女神および背神であり、樋水龍王神社そのものだった。妻は、神社を維持するために必要な使用人であり、かつ、『龍の媾合』に必要な生け贄でしかなかった。良子は子供が欲しかったが、武内は『背神代』と『妹神代』には古来絶対に子供が授からないことを知っていた。避妊など必要ではなかった。

そして、二職は終身であった。つまり、どちらかが死ぬまで信二と樋水龍王神社から自由になりたいという良子の願いは叶わないのだった。

『龍の媾合』のたびに良子は離婚してほしいと頼んだ。だが、信二は冷たく断った。優しく人間らしく扱ってほしいと頼んだこともあったが、信二には良子のいう意味がわからなかった。彼は何も悪いことをしていないと思っていた。先代の宮司が亡くなってから信二は宮司となり、良子は宮司夫人として腰を据えて仕事をしてほしいと言い渡し

た。良子の宮司夫人である以前に、人間でありたい、妻でありたいという願いは理解すらしてもらえなかった。それはこの神社では当然のことだった。先代も先々代も全く同じだった。当時は女には「妻として、人間として」などという概念は存在していなかったので、良子ほど悩んだわけではなかったが。

三度目の『龍の媾合』が来年に近づき、良子は五十三歳になっていた。両親は死に、もう帰る場所はなかった。兄弟は良子を厄介物扱いしてみっともないから離婚したいと騒ぐなと戒めた。良子は平均余齢まで、この冷たい神社で冷たい夫と苦しみを共有するのが堪えられなかった。だから、自由になれるたった一つの道を選んだ。表向きは病死ということになっている。

高橋勝は、武内信二が冷血漢だとは思っていない。信二は今でも勝の大切な友だった。感情の起伏は多くないが、喜びも悲しみもあった。勝と日本酒を酌み交わし、いろいろなことを話すいい友だった。彼は彼なりに良子を大切にしていたと思う。だが、それは良子には十分ではなかったのだ。信二にとって一番大切なものを良子は大切に思えなかった、もしくは良子にとって重要だったものに信二が価値を認められなかった、それが悲劇だったのだ。

この樋水で龍王に仕えるように育てられたものは、外の人間のように考えない。龍王がいかに理不尽な要求をして来ても、樋水の神職はそれを当然のこととして受け入れる。周りが二十一世紀だ、基本的人権だと言おうとも、この樋水には全く関係がなかった。樋水は龍王と神社のために存在するのだ。とくに、あの鳥居の中に選ばれて行ってしまった者は、そうなる他はないのだった。勝の父が『鬼』と呼んだのはそれであった。

弟の悟が、東京に行きたいと言い出したとき、勝は驚いた。

「東京なんかに行ってどうするんだ。仕事は大変だし、生活費は高いし、都会の人間は冷たいぞ」

だが、悟は半ば挑むような目をして勝に言った。

「ここにいたら、一が『鬼』にされる」

勝は、武内信二が一をかわいがっていることを思い出してショックを受けた。確かに一は六白金星生まれだった。樋水の氣をたっぷり浴びて、見事な純白の氣が育っていた。事態は深刻だった。勝は、東京行きのことは決定するまで誰にも言うなと悟に言った。そして、できるだけ早く事を進めろと。一刻の猶予もならなかった。

「やっと、見つかった」

それは、五年前に突然龍王が姿を消し、樋水川の水が枯れるという異常事態が起こった翌日のことだった。信二が日本酒を持って勝の喫茶店にやって来た。勝はついさっき、一と婚約者が笠宮神社からの二人をつれてレンタカーで去るのを送り出したばかりだった。

「何が？」

「あの二人だよ。『背神代』と『妹神代』だ」

最初、勝は一と摩利子のことを言われているのかと思った。

「摩利子さんは六白じゃないぞ。二歳年下だといっていたからな」

「一くんの話じゃないよ、笠宮さんの二人だ。しかも二人とも六白だ」

「そうか？　ゆりさんは一と百貨店時代の同期だと言っていたから六白かもしれんが、ご主人は十年先輩だと言っていたぞ」

「二月生まれの六白金星だ。もう笠宮さんに電話をかけて確認した」信二は『鬼』の目つきになっていた。

新堂夫妻が『背神代』と『妹神代』に決まったと聞いた時、高橋勝は心から安心した。その上、一がしっかり者で別嬪の婚約者と、喫茶店を継いでくれることになり、勝は何もかもが順風満帆に思えて嬉しかった。この嫁が派手な見かけにもかかわらず非常に出来た女で、店を最高に良くしてくれた。

だが、勝は今、一抹の後ろめたさを感じている。勝が二日の差で逃れた運命を武内信二と良子が、一が弟の転機で逃れた運命を新堂朗とゆりが背負っている。信二は善良で正しい心のまま『鬼』になった。そして、新堂朗もいずれは『鬼』になってしまうのかもしれない。

来たばかりの頃のゆりは良子に較べて芯が強く、自分の運命を受け入れているように見えた。だが、彼女の胎内で育つ何かは静かに確実にゆりを蝕んでいる。朗とゆりは武内夫妻よりもはるかに強い結びつきを持っていたが、それすらも壊れかけるほどの重い試練が二人にのしかかっている。自分や一には到底乗り越えられなかった重荷を、あの二人は背負うことになったのだ。勝はゆりがかつて一の婚約者だったことも、朗とゆりが二神とされている二人の生まれ変わりであることも知らなかった。だから、二人がここに連れてこられて経緯もよくわかっていなかった。だからこそいっそう、二人に対して大きな憐憫を感じた。二人がこの試練を乗り越えてくれればいいと切に祈っていた。

味到

十三夜の月が明るかった。真夜中の龍王の池は静まり返り、浅き春の香りが澄み切った空氣に満ちていた。いつものように瀧の音が響き、風が時折そのリズムを乱した。瀧の下には既に二時間以上浄衣姿の男が座っていた。その身からは『見える者』にだけ感知の出来る、青紫の炎が妖しく揺らいでいた。

朗は『荒ぶる氣』を消すことが出来なかった。ゆりが身重になって以来、朗の『荒ぶる氣』は増える一方だった。最初は『龍の媾合』のトラウマだった。朗のゆりを抱きたいという氣持ちは著しく妨げられた。その後しばらくは身重のゆりの体を思い控えていた。そして今はあまりにもゆりの体型が変わってしまったのでその氣になれなくなってしまった。

いまや、ゆりは朗を和めるような精神状態ではない。かつてはどれほど仕事で心が荒んでも、ただ家に帰りさえすればそこに平和があった。現在は一番心が荒むのが家になってしまった。ゆりをなだめようにも、自分の氣がこれほど荒れては、平静心を保つのは難しい。朗はなんとかしなくてはならないと思っていた。

樋水ほど清浄な水はほとんどなかった。この瀧が家の前にあることは朗の大きな助けになるはずだった。ゆりはかつてしばしばこの池で泳ぎ、龍王と戯れた。水から上がったゆりは輝くばかりに浄められて、神々しいほどだった。

だが同じ水は、朗を和めなかった。どれほど時間をかけても、朗の『荒ぶる氣』は減らなかった。減っているようで、再び増える。結果

として、以前よりも荒ぶっている。龍王が朗を差別しているのではない。氣は朗の心から出ている。朗の心には龍王には浄められない闇があった。

朗はついに諦めて水から上がった。この池にはじめて来た冬の夜のことを思い出した。やはり、今夜のような月の明るい夜だった。朗は広縁に座り、龍王と泳ぐゆりを眺めていた。そのゆりが水から上がり、濡れた白いからだが月夜に浮かび上がった。記憶が朗の心に強い痛みを呼び起こした。

部屋に戻り、寝間着に着替えた。タオルで濡れた髪を拭きながら、寝ているゆりを見た。月光が深く差し込み、ゆりの白い寝顔を照らしていた。朗は、ゆりの枕元に座った。深く眠るゆりは、今だけは平安の中にいた。恐れも悲しみも襲ってこない。朗の言葉や態度に過剰に反応して、不愉快な争いになることもなかった。穏やかな寝顔に朗はそっと手をあてた。乳白色の光が、いつもの帯電感とともに広がった。心が静まるのを感じた。

ゆりは夢を見ていた。その夢を朗は同じように見ることは出来なかったが、わずかな心の震えだけを共鳴することが出来た。朗が今まで感じたことのない感覚だった。かつては激しい恋情や性的な欲望でゆりに触れ、そのまま肉体の感覚や悦びに押し流されてしまった。ゆりの魂が体から遮断された時には、不安と怒りに支配されて心乱されていた。何でもない時に優しく触れれば、そのまま優しく手を離し、それ以上のつながりは感じなかった。こんな風に意識深く沈むゆりに、そのわずかな心の動きを感じるまで穏やかにただ触れたことは今まで一度もなかった。

ゆりの魂が夢に見て、朗が感じ取ることができるのは悦びとともに受ける風だった。馬の上での、Kawasakiの後ろでの。苦しみや不安が押し寄せる前の、至福の時間だった。それは当時の朗の魂も同じように共鳴した悦びでもあった。肉体が消え去り、言葉や概念が届かなくなっても、まだ残る輝かしい想い。二人の体は乳白色に輝いていた。

そして朗の心には次々と忘れられない光景が去来していった。蝉時雨の降り注ぐ丘の上の抱擁、泡雪の降りかかる満面の笑顔、十二単姿で翡翠の勾玉を差し出す真剣な表情、魂がもどり開かれたアーモンド型の双眸、菩提樹の黄葉が降りしきる下のはにかんだ微笑み。朗と一緒に紡いで来たゆりの時間だった。

蜻蛉の薄羽色の被衣を持ち上げてこちらを見る女は、もはや瑠璃媛ではなかった。それは今のゆりでも過去のゆりでもなかった。肉体が代わり変わろうとも全く変わらない魂の顔をしていた。月夜に浮かび上がる濡れた白いからだもゆりの肉体ではなかった。体の奥に潜む、薔薇色の輝きを放つ魂そのものだった。

常に側にいられる郎党の次郎に、一緒に笑い転げている高橋一に、当たり前のように共に泳ぐ龍王に対して燃やした激しい嫉妬の炎がようやく鎮まっていった。奪っても、力の限り抱いても決して満たされることのなかった渇きもようやく癒されていった。

それはお互いの肉体の中にはなかった。共に過ごした短い時間の中にもなかった。けれど二人の内に常に存在していた。太古、二つの魂は一つだった。そして、二つに別れた一つの魂は、再び一つになることを熱望していた。その願いは叶い、いまようやく一つになれたのだ。風は悦びを載せて走っていく。

部屋の奥まで差し込む明るい月の光に照らされて、みじんも動いていない二人の周りを、至福の風が通り過ぎていく。広縁の向こうでは、春の訪れを報せるレンギョウの葩が緩やかに舞っていた。動くものはそれだけだった。

疑惑

早良浩一からの電話を切って、一は小さくため息をついた。浩一は時折電話をかけてゆりの様子を訊いてくる。だが、その日は別の用事でかけて来たのだった。

「どうしたの。浩一くん、なんですって？」

摩利子は逡巡する一に声をかけた。一はうなだれて言った。

「ゆりのお祖母さんが亡くなったそうだ。浩一くんは、ゆりが病氣で来れないって家族に言ってくれるって」

摩利子もまたため息をついた。

「新堂さんに言った方がいいわよね」

「そうだよな。お通夜は明日で明後日が告別式だっていうから……」

浩一は、ゆりに関する樋水の秘密を知っていた。一年ほど前に、ふらっとゆりに会いに来たのだ。その日は地鎮祭で朗が不在だったので、直接池の側の家にゆりを訪ねていき、次郎に

「お会いになれません」

と追い出されて憤慨した。病氣だとしても姉に弟が会えないのはおかしいと踏み込んで、ほぼ臨月のようなお腹をしたゆりをみて茫然としたのだった。

「なんでだよ、姉さん。家族に隠すようなことかよ！」

だが、ゆりは泣くばかりでまともに話ができなかった。それで、浩一は開店準備中の『たかはし』にやって来たのである。

「そりゃ、ゆり姉さんは親父やお袋とあまり折り合いがよくなかったけど、親父たちは別に姉さんを虐待していたわけじゃないんだ。なの

に孫が生まれるのも知らせてもらえないなんて、あんまりじゃないか！」
　摩利子と一は、顔を合わせて、急いで浩一を中に引き入れると扉を閉めて、浩一を座らせた。浩一は悔しくて半分泣いていた。
「どうせ義兄さんのお父さんには報せているんだろう。孫を抱くのだって、あっちだけなんだ」
　摩利子は低い声で言った。
「報せていないわよ。孫なんて産まれないんだもの」
　浩一には摩利子の言っている意味がわからなかった。そして、別の解釈をした。
「ゆり姉さんが、何か間違ったことをしたってこと？　義兄さんを裏切ったってこと？　そんなひどいことを姉さんが？」
　摩利子は浩一の論理の飛躍にくらくらして絶句した。新堂さんに憧れるのは勝手だけど、なんでそうなるのよ。一が口を挟んだ。
「違うよ。そうじゃない。あのお腹の中にいるのは、確かに新堂さんの子供ではないけど、ゆりの子供でもないんだ」
　浩一は、全く理解できなかった。摩利子は信じてもらえないに違いないと思いながら続けた。
「あのお腹の中にいるのは、あの千年祭の時にできた龍の子供なの」
　浩一の氣持ちが一番わかるのは一だった。ここ樋水村ではそういう話が事実としてまかり通っている。住民の四分の一が『見える者』でその手の話はタブーでもなんでもなかった。だが、『見えない者』としては、そんなことを言われても困るのだ。一は浩一の前にどっかりと座ると、目をしっかり見据えて言った。
「浩一くん。君と同じで、僕にも何も見えないから、君が今どう感じているかとてもよくわかる。僕たちはそもそも『見えない者』にこういう話は一切しない。しても意味がないからだ。でも、君はゆりの弟だから知る権利があるし、僕たちがどうしてこんなことに関わっているのか知ってほしい。黙って聞いてくれるかい」
　浩一はしぶしぶ頷いた。
「君は子供の頃からゆりが普通の人と違うのに氣がついていただろう」
　浩一は無言で頷いた。
「ゆりは俺らには見えないものが見えた。できないことができた。新堂さんや摩利ちゃんみたいに」
　浩一は驚いて摩利子を見た。新堂朗はともかく摩利子までそっちのジャンルだとは夢にも思わなかったのだ。摩利子は黙って肩をすくめた。
「ゆりはご両親や君やお姉さんと違うことがつらくて、ずっと自分のことを隠して生きて来た。俺らにはくだらない夢物語にしか思えないことが、ゆりや新堂さんや摩利ちゃんにはそうじゃない。だから、俺らがそのことをただ否定してしまった時点で、俺らとゆり達とがわかり合うことはできなくなってしまう。だから、俺はいつもとりあえずそれを受け入れることにしている。わかるかい」
「ゆり姉さんに、霊が見えるとかそういうことなら理解できますよ。でも、龍って……」
「うん。ここには龍がいることになっている。俺には見えない。『見える者』たちが龍と呼んでいるものは、俺たちにわかりやすい言葉で

言ったら、超自然的な不思議な力とか、そういうものなのかもしれない。俺には本当の所はわからない。でも、龍がいなくなったと『見える者』がいうと川の水が干上がったり、『龍の媾合』といわれる日には何もしていないのに最高のセックスができたり、とにかく氣のせいというだけでは説明のできないことが平氣で起こる、それがこの村なんだ。だから、俺は龍の存在を信じている。摩利ちゃん達『見える者』にとっては事実だけど、俺にはそれは信じるという言葉を遣うしかないものなんだ。わかるかい」

「はい。一さんの言うことは、わかります」

「いま、ゆりの体に起こっていることは、それらのおかしなことの一つだ。ゆりはもう一年以上妊娠したままで、エコーの機械で映し出した時に人間じゃないと思われるものが見えた。これが俺たちに理解できる客観的な事実だ。加えて、『見える者』たちによると他にもゆりが妊娠しているのは新堂さんとゆりの子供つまり君の甥や姪ではない、何かあり得ないものだというに足る根拠があるらしい。ゆりはこんなことが起こったことに大きなショックを受けている。自分でもどうしていいかわからないで、本当に参っている。もし、君がここで大騒ぎをして、君のご両親やそれ以外のこの村のおかしなことに理解のない人に知らせたりすると、君がそれを望んでいるかいないかに関わらず、ゆりはもっと苦しむはめになる。それをわかってほしいんだ」

浩一は、しばらく手で額を抑えて考えていた。それからぽつりといった。

「僕は、ゆり姉さんの言っていることを馬鹿にしていたわけじゃないんだ。そりゃ、小さい頃はわからずにひどいことを言ったかもしれないけれど、大きくなってからもしそういうことを言ってくれたら、ちゃんと理解してあげたと思う。でも、姉さんは僕たちにいつも距離を置いていた。僕は姉さんに信用されていなかったのが悔しい。一さんや摩利子さんには何でも打ち明けているのに」

「信じてくれない人に話すには、あまりにも無茶な背景を抱えているのよ、ゆりさんと新堂さんは。だから、黙っているのが一番だと思ったんでしょう」

浩一は摩利子に喰いかかった。

「他にも何かあるんですか。姉さんは義兄さんとは職場で知り合ったとしか言っていなかったけれど」

「それは間違いじゃないよ。少なくともこの世では」

高橋一の意味ありげな言葉に、浩一はくらくらして、それ以上訊くのを止めた。

だが、浩一はそれからゆりの所に戻って、ゆりを慰めた。ゆりは、まさか浩一が信じて協力してくれるとは思っていなかったのでとても驚いた。それ以来、浩一はゆりと家族の間に入って、都合の悪いことをうまく処理してくれるようになったのだった。

朗が代わりに葬式に行った。自分の代わりに行ってもらうのに、ゆりは行ってほしくなかった。葬儀にではなく、朗が泊まりがけで樋水を離れるのがとても不安だった。長いことゆりと朗は上手く話ができなかった。その原因を作り出しているのは主にゆりの方だった。

何を言われても素直に受け取れなくなっていた。朗が外の空氣を浴びた方がいいと言えば、怠惰をなじられていると受け取った。体を動

かすことを勧められれば体型を示唆されていると傷ついた。見られれば苦痛に思い、背中を向けられれば泣きたくなった。

ゆりははじめから自分に自信がなかった。朗は美しい瑠璃媛を愛し、その約束のために自分を選んでくれたのだと思っていた。近くにいればいるほど、自分が朗を失望させると怯えることになった。けれど一瞬でも長く朗のそばにいたかった。その矛盾した想いは、肉体が平凡から醜悪へと変わるに連れて増幅されることになった。

最初に一緒に過ごしたヴァレンタインデーに焼いたケーキを朗がとても氣に入ったので、ゆりは毎年そのケーキを焼いた。今年の二月十四日にも次郎に材料を買って来てもらい、準備を始めた。けれど、うまくいかなかった。動くことすらもままならない重い下半身で、台所に這うようにして入った。チョコレートや粉が飛び散り、あたりは惨状になった。台所で泣いているゆりを朗が見つけたのは夕方だった。台所を片付けてくれて慰めてくれたが、疲れて帰って来た朗に迷惑だけをかけたことがゆりを傷つけた。朗は言った。

「十八日はなにもしなくていいから」

二月十八日は朗の誕生日で、毎年ゆりは手をかけたディナーを用意していた。朗はゆりのことを思って言ったのだが、ゆりには「もうお前はいらない」と言われたように感じた。

しばらく前から、ゆりは自分の助けなしに朗の氣が変わることを知っていた。青紫の極陽の氣は穏やかで欠点のない朗が唯一見せる、コントロールできないいらだちや苦悩の現れだった。以前は祓いや迷いで氣が荒れた朗は、ゆりを求めて来た。ゆりはその氣を明るい青緑の健康な氣に変える力があることを誇りに思っていた。けれど、ここしばらく朗は、求めてくるどころかゆりにほとんど触れなかった。それなのに、前の晩までは強く刺々しく光っていた青紫の氣が、朝になると穏やかで優しい青緑に変わっている。

優しく穏やかな朗の顔を見て、ゆりは苦しかった。誰がこの人を癒しているんだろう。優しくてきれいな人なんだろうか。この人は、その人を深く愛しているんだろうか。心はもうどうやっても取り戻せないのだろうか。

ゆりには朗にそれを訊く勇氣がなかった。なにもかも表に出して、終わってしまうのが怖かった。どれほど嫌われようと、重荷に思われようと、たとえ憐憫と義務感だけで朗が自分の側にいてくれるとしても、失いたくなかった。

朗は泊まりがけで家を離れた。もしかしたらその人と逢って一夜を過ごすのかもしれない。自分の祖母の葬儀のときだというのに、そんなことばかり考えている自分が嫌だったが、ゆりにはどうすることもできなかった。

ゆりはほぼ一日中泣いていたので、困りきった次郎が摩利子を呼びに来た。どうしていいかわからないといって。摩利子は次郎にそんな状態のゆりを一人にして出てくるなんてどういうつもりだと叱りつけ、すぐにゆりのもとに向かった。

摩利子は慣れた手つきで、ゆりの台所でお茶を淹れると、ゆりが落ち着くまで黙って泣かせてやった。やがてゆりは泣くのを止めて摩利子の哀れみに満ちた顔を見た。

「ごめんなさい。摩利子さん。自分でもどうにもできないの」

「わかってる。遠慮することないのよ。おばあさんのことは御愁傷様

です。泣きたい時には好きなだけ泣くといいんだわ」
「呆れるだろうけれど、祖母のことで泣いているんじゃないの」
　摩利子は黙って肩をすくめた。
「摩利子さんはいつもきれいだから、きっとわからないんじゃないかしら。愛どころか敬意までも失って、憐憫だけで誰かをつなぎ止めるみじめさなんて」
　摩利子には、その感情は本当にわからなかった。摩利子は去る者は追わず主義だったからだ。ゆりはぽつりと続けた。
「朗さんは瑠璃媛を探していたのよ。瑠璃媛は摩利子さんみたいに、本当にきれいな女の人だったらしいわ。次郎さんがいっていた。そうでなかったら、私みたいな女に朗さんは目もくれなかったと思うわ。瑠璃媛が千年分の思慕を朗さんに植え付けて、私がそれを全て壊してしまった。それで泣いているの」
「ゆりさんは、自分を卑下し過ぎだわ。今ゆりさんがその体型なのはゆりさんのせいじゃないし、ゆりさんの努力が足りないからでもない。新堂さんはそれを誰よりもわかっているし、それ以外ではゆりさんは誰にも負けないくらい素敵な人なのよ。それに、私をきれいと言ってくれるのはありがたいけれど、持って生まれた素材で言うと、本当はゆりさんの方がずっときれいなんだから」
　ゆりは悲しそうに摩利子を見た。摩利子の言うことに全く同意していない顔つきだった。摩利子はいらいらした。マイナス思考もほどほどにしなさいよ。言葉にしないがそう思った。
　ゆりは自分の疑惑を摩利子に話した。摩利子は「あ」といった。確かに朗の氣は突然変わっていた。ゆりの疑惑はもっともだった。
　でも、あの新堂朗がこの村で簡単に浮氣なんか出来るのだろうか。誰と？　この村の独り者の女は高齢者か子供ばっかり、人妻はけっこういるけれど、どれも田舎臭くて朗の好みに合わなそう。そもそも、摩利子は二年前までの新堂のゆりへの熱愛ぶりを知っていた。でも、一のポルノ雑誌の件で「女の裸体に興奮するのは男の生理現象」とかいっていたから、絶対あり得ないというわけでもないだろう。これはいずれ解明しなくちゃ。だが、摩利子は自分の好奇心の問題をゆりに悟らせなかった。
　ゆりは相手が誰かということ自体にはあまり関心がないようだった。摩利子でなければいいぐらいに思っていた。ゆりにとって恐ろしいのは朗を失うことだった。
「朗さんは樋水が嫌いだった。私が来たがったから自分を曲げてここに来てくれたの。その結果、私はこんな風になってしまい、朗さんを失いかけている。あの人はここを出て行きたいはずなの。前は、私を必要としてくれていたけれど、今は一人で行きたいと思っているはずだわ。でも、あの人は優しいから、私をここに捨てて行けないのよ。私が行ってもいいといわなければあの人は自由になれないとわかっていて、私はあの人を諦められないの」
「ゆりさん……」
「怖い夢をたくさん見るの。お腹を食い破って恐ろしいドラゴンがでてくるとか、炎の中で焼かれるとか。だから、早くこのお産が終わってほしいと思うと同時に、何も起こらないでほしいとも思うの。自分が命を落とすこともよく考える。早く死んでしまいたいと思うこともある。でも、今は死にたくないわ。死んでしまったら全て終わって

しまう。あの人は行ってしまう。次に生まれ変わってももう二度と捜してくれない。どんなに嫌われても、愛してもらえないのが辛くても、今しか一緒にいられないのなら、どうして手を離せるの？　摩利子さん、どうしたらいいの？　どうしたらあなたみたいに強くなれるの？」
「ゆりさんは私みたいになる必要はないの。泣かないで、ゆりさん。お産はそんなに怖い結果にならないかもしれないじゃない。それさえ終わったら、頑張ってダイエットしましょうよ。そしたら、きっと前みたいに幸せに戻れるわ。そうでしょう？」

青龍時鐘

花祭りの日だった。暦を見ていて、朗は不安な氣持ちになった。三碧木星が年、月、日ともに揃っている。東、青龍の支配する日だ。計算してみると千年祭の日から実に八百九十一日だった。九掛ける九十九。出来すぎている。仕事を早々に切り上げて家に戻り、ゆりに体は何ともないか訊いた。
「なんともないわ、どうして？」
「なんでもない。私の氣のせいだ」
朗はゆりを不安にさせまいと言った。だが、ゆりはもう不安になっていた。
「教えてくれてもいいじゃない、そんなに慌てて帰って来たんだから」
それで朗は日付のことを口にした。ゆりは激しい恐怖を感じた。
「心配するな、私はここにいる」
その言葉にゆりはヒステリックに反応した。
「ここに居てあなたに何が出来るの。もし何かがはじまっても、私は病院にも行けないのよ。あの宮司が隠し通そうとするに決まっているもの。それに今日は花祭りで、みんなお酒を飲んで騒いでいるわ。私がここで龍に食い殺されても誰も氣がつきっこない」
「馬鹿なことを言うな」
朗はヒステリックに泣くゆりの肩を抱こうとしたが、ゆりは激しく拒否をした。
「離して！　私はいま何ともないの。これ以上不安にさせないで」
「ゆり。すまない。泣くな」

「泣くぐらい自由にさせてよ！　他には何もできないんだから。あなたは好きなところに行けるんだから、どこかに行ってしまえばいいんだわ」
　朗は呆然としてゆりを眺めた。
「本氣で言っているわけではないんだろう」
　ゆりは苦しそうに顔を歪めて、朗を見、やがて言った。
「本氣よ。私を放っておいて。一人にして」
「わかった」
朗はため息をつくと立ち上がった。わずかに傷ついていたが、ゆりをこれ以上刺激しない方がいいと思った。何ともないなら、しばらく一人にしておいても大丈夫だろう。彼女が冷静になるぐらいの間。
　出て行く朗の後ろ姿を見ながら、ゆりは強い後悔に襲われた。行ってしまう、本当に。なぜあんなことを言ってしまったんだろう。なぜ怖いので側にいてほしいと素直に言えないんだろう。もしかしたら今夜はもう戻って来てくれないかもしれない。私が出て行けと言ってしまったんだもの、大喜びで女の人の所に泊まるかもしれない。ゆりは悲しかった。
　一時間ほど泣いていたが、ふいにお腹の中で、何かがぐるりとまわったような氣がした。
（うそよ、氣のせいだわ。あんなことを聞いたからナーバスになっているだけよね）
　けれど、それはただの始まりだった。それは間隔を置いてぐるぐると動くようになり、金色の光はゆっくりと青白く変わっていった。やがて、腹部の中で何かが泳ぐように激しく蠢きだした。
「いや。そんな……」
　ゆりは、パニックになって朗の出て行った方へ動こうとした。けれどその何かは反対の広縁の方向、龍王の池の方へとゆりを引っ張った。腹部が激しく収縮をはじめた。ものすごい痛みだった。ゆりには出産経験がなかったが、それが陣痛であることはすぐにわかった。激しい痛みとともに大量の水と血が醜いぶよぶよとした太ももに溢れ出し、何かが下方へと突き破って出てこようとするのを感じた。
　雲一つないいい天氣だったはずなのに、雷鳴が遠くから近づいて来て、雨が降りだした。
　三碧木星。青龍の支配する日。なぜ朗さんの心配を無碍にして追い出したりしたんだろう。青白く明滅して光る腹部を見ながらゆりは自分の愚かさを悔やんだ。
　ものすごい力で広縁の方に引きずられている。ゆりは必死で引き戸につかまったが引き離されて広縁から転げ落ちた。
「いや。朗さん、助けて」
声は、届かない。
　もう二度と会えないかもしれない。ゆりは突然思った。「死ぬかもしれない」と安易に言っていた自分の言葉は、まったく本氣ではなかったのだと、思い知った。
　ひと言も言わなくても朗が樋水から出て行きたがっているのを、ゆりは深く感じていた。自分のために本来の意志を曲げてこの村に縛りつけられていることを、ゆりは氣の毒に思っていた。このお産で自分が本当に死んでしまうなら、その最後の瞬間には朗を自由にしてあげたいと、幸せな彼の人生を願ってあげたいと思い続けてきた。まだその時が来ていないなら、それまではせめて形だけでも彼の妻としてそばにいたいと、そのわがままを許してもらいたいと思っていた。しか

し、ゆりは自分の愚かさから、その最後の愛情を伝える瞬間を手離してしまった。

生まれてからずっと孤独だったゆりを、本当に幸せにしてくれたのは朗だった。何度も苦境から救い出してくれたのも朗だった。愛することと愛されることを教えてくれたのも。泣いたり、責めたりする必要など何もなかったのに、ゆりは自分への引け目から本当に嫌な態度ばかり示してきた。嫌われ、よその人に心を移され、それでも一緒にいてくれようとしたのにそれを拒んでしまった。これが報いなのだと思った。

激しく降りしきる雨の中、石や砂利や木の枝などの上を引きずられて、ゆりの体は傷だらけになりあちらこちらから血がでていたが、陣痛の痛みの方がずっと大きく、ゆりは体がぼろぼろになるのも氣にしなかった。愚鈍で醜く価値もない肉体などどうでもよかった。

やがてゆりは池に引き込まれた。溺れる恐怖に、岩に必死でしがみつき抵抗した。

そして、そこが夫婦桜のすぐ下であることに氣がついた。雷雨に叩かれて花が無惨に散っていた。多くの葩は幹にまとわりついていた。根元からねじれて重なった二本の幹が、白く光りながら雨の中固く抱き合っているように見えた。ゆりははじめてこの樋水で泳いだ晩に濡れたまま朗に抱きしめられたことを思い出した。

ゆりは突然悟った。私は、あのとき愛されていた。いつも私たちにはあの白い光があり、抱き合うと心が一つになった。Kawasakiで風を共に感じたこと、闇の中から引き上げてもらい疲れきった朗に強く抱きしめられたこと、キャンドルのゆらめくテーブルで「君を幸せにしたい」と言ってくれたこと、蝉時雨の降る丘の上ではじめて口づけされた時のこと、万感の想いを込めて翡翠の勾玉をつけてくれた時のこと、全てが一時に甦ってきた。

一緒に馬に乗っていたのも、翡翠を渡したのも朗だった。子供の頃から深く愛し合っていた『夢のひと』は朗だった。

この二本の桜のように、切り離せない強い絆で結ばれていた二人だった。春昌と朗は別の肉体を持っていたが、心は一つだった。そしてその一つの心が愛したのは、瑠璃媛やゆりという個別の肉体ではなく、もっと深い、もっと本質的な、瑠璃媛であった頃から変わらないたった一つの心だった。私はその愛を知っていた。言葉ではなくて、心で知っていた。知っていたのに認めなかった。私がそれを認めて大切にしていたら、彼は今でも私を愛していてくれたに違いない。肉体が醜いから愛してくれなくなったのではない。心が醜くなったので、私は彼を失ってしまったのだ。もっと早くにそれを知っていれば、せめて今夜は一緒にいられたかもしれないのに。

ゆりは、自分が陥った暗い沼が何であるか突然悟った。あれは、私がこれからいくところだ。未来永劫失われた片身を求めて彷徨う孤独の煉獄。朗のいない未来。何よりも大切なものをこの手でつかみ、この桜のようしっかりと抱きしめていたはずなのに、自分からほどいて捨ててしまった罪への報いに行く場所だ。二度と捜してもらえない。二度とあの魂の震える抱擁を交わすことはできない。彼は、私がまだこれほど渇望していることを知ることはないだろう。

それでも、彼に幸福でいてほしかった。他に愛する人がいるならば、その人とならば幸せになれるなら、その愛の成就を祝福してあげたい

と思った。あの太陽のような笑顔で生きていってほしいと願った。
一目でいいから朗の姿を見たかった。謝って別れを告げたかった。彼を千年にわたり縛り付けた翡翠の勾玉の代わりに、彼の新しい自由な幸せを願う言葉を伝えたかった。たとえ自分はそれから万年、億年もの孤独に苦しむとしても。

新しいボトル

「一はどうした？」
朗は店を見回した。珍しく摩利子一人だった。客も途切れた所のようだ。
「花祭りの露店にね。新しい試みとして、鴨のロースト入りのおつまみセットを用意してみたのよ。試しに売りに行ってみるって。参道で会わなかった？」
「参道は通らずに来たからな」
ということは、人に見られずに来たかったわけだ。
「ゆりさんは？」
「一人になりたいそうだ」
朗はいつものようにウィスキーを飲みながら、摩利子が適当に見繕って出した肴をつついた。だが、進むのはグラスの方ばかりだった。
調理師免許を二人とも取り、店は一と二人で切り回すようになってから、新堂と二人きりという機会はめったにない。摩利子はせっかくだから単刀直入に訊いてみようと思った。
「ねえ、立ち入ったこと訊いていい？」
「どうぞ」
朗は、ほらきたという顔をして言った。
「もうゆりさんのこと愛していないって本当？」
「誰がそんなことを」
「ゆりさん」
「馬鹿なことを」

「そう？」
摩利子はじっと朗を見つめた。朗はグラスの氷を揺らすと、はぐらかすのは止めて、静かに言った。
「君たち女にとって、愛しているってのは、毎日バラの花を捧げてひざまずくことか。それとも主にセックスのことを指すのか」
「ごぶさたなんじゃないの」
　朗はため息を一つついた。
「今の彼女に欲望は感じないよ。だが、それはいずれにしろいつかは終わるものだ。まだ彼女はそういう年齢ではないが、結婚生活があと二十年続けば、どこの夫婦でも普通に起こる問題だろう？」
「そうね。でも、少なくとも、いつも一緒にいたいと思う？」
「今の状態を続けられると、正直いって厳しいね。時折こうして息抜きをしたくなるよ」
　ヒステリー状態になって泣くゆりを見て、摩利子も同じことを考えた。ゆりに対する同情よりも、これは新堂がたまらないだろうと思ったのだ。
　でも、摩利子は悲しかった。なぜこんな風になってしまったんだろう。
「ゆりさんがああなってしまったのは、彼女のせいじゃないわ。それは新堂さんだってわかっているんでしょう」
「もちろんだ。それに、私は彼女が嫌いになったわけではないよ。それは心配しなくていい」
「でも、ゆりさんは、新堂さんに他に好きな人がいると思っているのよ」
「そう言ったのか」
「正確には、そういう言い方じゃなかったけれど、でも、そういう意味だと思うわ。誤解しないでね。ゆりさんは怒ったり責めたりしたいんじゃなくて、新堂さんがそうなっても当然だと思っていて、それで傷ついているのよ」
「君もそれが当然といいたげだな」
「ゆりさんの言った根拠が、納得性があったから」
「根拠？」
「新堂さん、前に私とプラスマイナスの話したじゃない？」
「プラスマイナス？」
「ほら、新堂さんと私はプラス同士だからセックスしても氣が荒れるってあれ」
「ああ、あの話か。それが？」
「ゆりさん、新堂さんの青紫のオーラを消している人がいるっていうの。あれって、新堂さんの特別に荒れている氣なんでしょ？　私も氣づいていたわ。ゆりさんがああなってから、新堂さんのオーラがだんだん強い青紫になっていって、でも、時々完全に元に戻っている。ゆりさんがそれを言った時、ああそうかって思ったわ」
　朗は、深いため息をついた。
「まったく……。勝手に想像をめぐらせて……」
「私たちの誤解なの？」
「ああ」
　朗は、グラスが空になっているのを見て、新しいボトルを注文した。
「ゆりと結婚する前に、笠宮神社の峯岸先生に女を作れといわれた。祓

いなんかやっていると氣が荒れるからとね。『荒ぶる氣』を和ませるのは『和める氣』で、たとえば滝に二時間くらいあたるなどの方法もある。だが先生によると手っ取り早いのは陰の氣の強い女と寝ることだといわれた。ゆりは、本人は氣がついていないが尋常でない『和める氣』を持っている。だから私は氣が荒れるたびに条件反射のように彼女を抱いた」

「ゆりさんもそれを知っていたのね」

「彼女も氣が見えるから、もちろん知っていたと思う。だが、正直いって『荒ぶる氣』のためにだけなら、抱く必要はないんだ。ゆりに触れるだけで、十分なんだから。それほど彼女の『和める』力は強いんだ」

摩利子は目を丸くした。

「ゆりがああなって、触れる機会が減ると、確かに私の氣はひどく荒れだした。これではいけないと自分でも思ったよ。だから、他の方法を考えた。もちろん君たちのいうような解決策ではない。家の目の前に瀧があるんだから、まずそっちを試した」

「あら」

「ゆりはここ一年ほどとても深く眠る。だから、私が抜け出してもまったく氣がつかない。だから理論的には私は他の女の所にも通えるんだが、そっちはまだ試していないんだよ。とにかく、私は瀧にあたって氣を和ませようとした。一の氣の親玉だから、二時間どころか数分で和むんじゃないかと期待してね」

摩利子ははじめて一に出会ったときの驚きを思い出した。いつも一緒にいるから当たり前になっているが、一の氣の清浄さはただごとではなかった。

だが朗の表情は暗かった。

「あたっても、あたっても氣は和まない。それどころか反対にもっと荒れていく。やがて氣づいたんだ。どれほど瀧が、龍王が清浄でも、私を和めることはできない。何故なら私の心の中に闇があるからだ」

「新堂さん……」

「それで、私は諦めた。着替えて部屋に戻ると、ゆりは深く眠っていた。苦しみや悲しみとは無縁な穏やかな寝顔だった。千年祭の前のゆりのようだった。それで、私は思わず彼女に触れたんだ。目を覚まさないようにそっと。そうしたら、どうしても和ませることのできなかった『荒ぶる氣』が、それだけで消えていった」

朗はそれが答えだと思った。なぜ龍王の瀧が朗の氣を和ませられず、反対に更に荒ぶらせるのか。朗はもはや龍王に使える神職ではなかった。たぶん初めから、千年前から今に至るまで一貫して、朗はゆりをめぐって龍王にたてつく異端児だった。この樋水にいるのはただ、ゆりのためだけだった。ゆりが幸せであることだけを祈ってここに来たのに、反対にゆりは苦しむことになった。朗を荒ぶらせていたのはこの想いだった。

「じゃあ、新堂さんは、ゆりさんが眠っている時にこっそり触れて氣を和ませているの？」

「そうだ。そうすれば彼女に変な負い目をもたせずに済むかと思っていた」

「馬鹿ね。反対よ。ゆりさんが起きている時に、堂々と触れてあげて。ゆりさんは、新堂さんのために自分がしてあげられるたった一つのことすら、もう必要とされなくなってしまったと嘆いているんだから」

「そうだな。私たちは二人とも馬鹿なんだろうな」
「じゃあ、新堂さんとゆりさんは大丈夫なのね」
「私はそう思っているよ」
「でも、新堂さんは、誰かを憎んでいる、そうじゃない？」
朗は、しばし下を向いていた。摩利子に朗の青紫の炎が見えた。
「君は、本当によく見ているね」
朗はやがてぽつりと言った。
「私は自分の仕えているものを憎んでいる」
樋水の龍王。そうだったんだ。摩利子は、朗の自己矛盾の苦しみにようやく思い当たった。自由意志を無視して、運命とか、宿命とかそういう格好のいい名前で縛り付けるもの。自分自身で人生を斬り拓いて来た朗にとって、自分で選んだ職業と主に振り回され、愛するものが苦しむのはどれほどつらいことだったのだろう。このままここにいれば、新堂朗はいずれ宮司になれる。けれど、武内宮司のように、全てをおいて心酔する者でなければ、龍王には仕えられない。九年ごとに苦しみ、ゆりとの生活と彼女の安全を犠牲にするのだ。
摩利子はずっとゆりは龍王に愛されているのだと思っていた。けれど、もしかしたら龍王にとって重要なのは、生まれてくる龍の子だけなのかもしれない。これまでゆりと朗を守って来たのは、このお産をさせるためだけだったのかもしれない。もし、新堂さんもそう思っているとしたら、それは龍王を憎く思うだろう。摩利子には朗の氣持ちがよくわかった。
「君には、言っておいた方がいいかな」
「何を？」
「このお産が終わったら、ゆりを連れてここを出て行こうと思っている」
「本氣？」
「ああ、本氣だ」
「でも、あのタヌキ宮司は龍王のためなら手段を選ばないから、すぐ連れ戻されるじゃないの？　大社とか神社庁にもやたらとコネがあるみたいだし」
「だから、神社にも龍にも関係のない所に行くんだよ。彼女が、普通の精神状態で生きられる所に」
「いいの？　あなたのキャリアを捨てちゃっても」
「そうしなければ、守れないものもあるんだ」
摩利子はじっと朗を見つめた。ちょっと目頭が熱くなった。
「ゆりさんって幸せね」
「悪いが、まだ一には言うな」
「どうして」
「あいつは馬鹿正直ですぐに顔に出るから、高橋総代からタヌキに筒抜けだ」
摩利子は吹き出した。
「了解。でも、私たちにはいつまでも秘密にしておかないでよ」
「わかってる」
朗は伏し目がちに言った。
摩利子はカウンターに乗り出していった。
「ねえ。新堂さん」
「なんだ？」

「ちょっと、見直しちゃった。今回はゆりさんのために遠慮するけど、次に生まれ変わったら、猛アタックするから覚悟しておいてね」
「光栄だな」
朗は力なく笑った。

和解

外の暖簾がはげしく引き戸に打ちつけられた。その音に二人は同時に外を見た。風で引き戸がガタガタと揺れだしている。
「へんね。あんなにいいお天氣だったのに。崩れてきたのかしら」
摩利子は表に出てみた。
「やだわ。雷雲。こんな時期に。花がダメになっちゃうかも」
朗も出てきた。遠雷がどんどんと近づいてくる。ただならぬスピードだった。そして、突然の稲妻とともに落雷がおこった。
「お社の近くに！」
摩利子が叫んだ時には、朗は背広をとりにカウンターに戻っていた。カウンターに代金を置くと、背広を着て出て行こうとした。
「ちょっと待ってよ！　多すぎるわ」
「ボトルを入れたじゃないか」
「それにしても二倍近くあるわよ」
「すぐにまた来るよ」
そういって朗は降り出した雨の中を社に向けて駆け出していった。ただの雷雨ではないと朗が思っているのは間違いなかった。摩利子はいい知れぬ不安に襲われた。これから何が起こるのだろう。そして新堂さんたちはどうなるのだろう。はやく一が帰ってきてくれるといいのに。そしたら、店を閉めて二人でお社に様子を見に行ってみよう。

朗はゆりの名を呼びながら部屋に入った。ゆりの姿はそこにはなかった。畳が水と血で汚れている。そのシミが縁側へと続いていた。

朗は背広をその場に脱ぎ捨てると、すぐに庭へ降り、激しい雷雨の中をゆりの名を呼びながら瀧へと向かった。あの姿でそんなに遠くまで行けるはずがない。

暗闇と雨に邪魔されて、ゆりがどこにいるのかすぐにはわからなかった。だが直に朗は夫婦桜の根元の水辺にいるゆりをみつけた。白い寝間着が闇に浮かび上がっているが、体の半分は水の中に入っていた。

激しい痛みに喘ぐゆりは朗に氣づかなかった。朗は必死でゆりが水に引き込まれないように腕をつかんだ。ゆりは弾かれたように朗を見た。

「破水したのか」

ゆりは歯を食いしばりながらうなづいた。

「水の中の方が楽なのか」

ゆりは弱く首を振った。それから絞り出すように言った。

「下に、引っ張られているの」

朗にもゆりの体は浮かないことが理解できた。このままではゆりは水底に沈んでしまう。朗は体勢を変えてゆりを抱きかかえるようにした。ゆりは首を振った。

「ダメよ……。無理だわ……。もう一度、逢いたくて、こらえていたけれど……」

それから必死に歯を食いしばると、渾身の力を込めて声を絞り出した。

「このまま、一人で、いかせて……。そして、あなたは、自由になって……」

ゆりの眸の強い光、肉体的な痛みをはるかに超える心の痛みは、涙となって流れ落ち、朗の心を射た。ずっと言うべきだと考えていたことを、自分への断罪をゆりは口にした。朗は、誰よりもゆりをわかっているので、すぐに意味を理解して、ここまで追いつめてしまったことを激しく悔やんだ。

「だめだ。一人で行かせたりはしない。私も行く。絶対に君と離れない」

稲妻が光り、ゆりの姿が白く浮かび上がった。ここしばらく見た事がなかったような、素直な驚きの表情だった。ふたりを包む乳白色の光はいつものままだった。雨が激しく打ちつけて雷の音が激しいのに、ゆりには朗の声が驚くほどはっきりと届いた。

「このお産が終わったら、二人でここを出て行こう。どこかで龍とも神道とも関係のない、何でもない平凡な夫婦として、残りの人生を平和に暮らそう」

「朗さん……」

「だからそれまでは、絶対に君の手を離さない」

ゆりは微笑んで泣いた。痛みを忘れたかのような、幸福にみちた微笑みだった。朗の腕をしっかりとつかむ力が感じられた。自己否定からずっと朗を拒みながら、どうしようもなく求めていたその思いが、すべて込められていた。ようやく間に合ったと、朗は思った。たぶん、ゆりが必要としていたのはこの言葉だったのだ。ただ、言ってやればよかったのだ。

引きずられるように水の中に降りていくと、二人はしっかりと抱き合った。

「息を吸って」

朗の合図を最後に、二人は水の中に引き込まれていった。ゆりの白い寝間着の間から、血がしみ出して水の中に煙のように広がっていく。その先に、時折青白く光るウミヘビのような形が揺らめいた。蛟だ。生まれようとしている。そして水底へ向かおうとしている。その人智を超えた強大な力に巻き込まれて、二人は誰も見たことがないという深い瀧壺の底へと連れられて行こうとしていた。

ゆりの白い寝間着は、経帷子のようにも見えた。そんな思いは不吉だと思いつつ、朗は必死でゆりを抱きしめた。不思議なことにゆりの体はそれほど大きくなかった。むしろ、はじめて胸に抱いたあの夏の日のようにか細く壊れそうでもあった。乱れた髪の中から時折のぞく表情は落ち着いていて、目は堅く閉じられ、やはりはじめて思いが通じたあの日のように、しっかりと朗の胸に顔を埋めていた。朗がゆりへの愛の本質を悟った、あの月夜の晩と同じ、瑠璃媛でもなくゆりでもない、そしてその二人のどちらでもある魂の横顔だった。

いま死なせたくはないと思った。龍王よ、あなたはこんな風に死なせるために彼女をここへ連れてきたのか。どうか、助けてやってほしい。朗は息苦しさの中で祈った。

ようやく私たちは本当に一つになれたのだ。時間軸の交わりではなく、肉体の媾合でもなく、ましてや民法などという社会の決めた紙切れの上の関係でもなく、太古に二つに切り離された一つの魂が、ようやくまた一つになれたのだ。だから、このうたかたの時を二つの儚い肉体でもう一度共に生きたい。私たちは、十分仕えたはずだ。どうかもう自由にしてほしい。

どれだけ長く息を止めていただろうか。朗の肺は限界を訴えだしていた。まだ諦められない。そう思う心よりも、だめかもしれないという思いが強くなっていった。

池の水面は静かだったが、更待月の光は深い瀧壺には届かなかった。暗闇の中、無念と憐憫の青紫の炎が燃え立っていた。そこに八重桜の花のような光が柔らかく絡み付き、炎を若葉色に変えていく。二人の腕は夫婦桜の幹のようにお互いに絡み付き、常にあった乳白色の光が、『龍の媾合』の時のように金と虹色のリズミカルに波打つ光に変わっていった。

お互いの姿はもうとっくに見えなくなっていた。けれど、一緒にいる。あの時と同じように、切り離された個別の存在という意識はなくなっていた。

ここにいようと、どこかへ行こうと同じだった。千年前であろうと、今であろうと変わらなかった。水の底であろうが空の彼方であろうが構わなかった。二つに別れていたものは、ひとつになった。

自と他。個と全体、肉体と魂、野心と無私、苦しみと悦び、光と闇、記憶と夢、過去と未来、音と光、憎しみと愛、龍と人、自然と人の手によるもの、極小と無限、生命であって物質であるもの、そこにあってそこにはないもの、とどまる処と行くべき場所、生まれ来るものと死に行くもの。全てはひとつだった。

絡み付いた腕とからだ、渦巻いて光る若緑と薄桃色の炎、輝く黄金の虹。ねじれて旋回するその姿はやがて完全な純白に集結し、翡翠の勾玉の放つ冷たく暖かい青白い輝きになった。二人だったものの意識としてわずかに残っているのは、至福の中で感じる風だった。

去年の春

昨年の鴨のローストがとても好評だったので、一は今夜も参道の近くの露店売りに出かけていった。だから、この花祭りの宵も私は一人で店番だ。あの夜、新堂さんの飲んだ山崎のボトルはあれから一度も開けていない。あの夜を最後に二人は突然いなくなってしまった。

宮司や次郎さんをはじめ、町中を巻き込んで二人の捜索をしたけれど、二人の行方は杳として知れなかった。このボトルと同じように、二人が生活していたそのままが全て残されていたし、二人がどこかで事件に巻き込まれたような痕跡も全くなかった。ただ煙のように二人ともいなくなってしまったのだ。

あの突然の嵐に意味があるとしたら、ゆりさんのお産は終わったのだとしか思えない。実は、私は初詣のときに一度だけあの瀧の近くで龍王の姿を見た。三分の一ほどの大きさの青白い蛟が尾のそばにまとわりついていた。見間違いではないと思う。次郎さんも去年の秋に青白い蛟を見たと言っていたから。

あれがゆりさんの産んだ子だとしたら、ゆりさんはあの晩に身軽になり、新堂さんが私に打ち明けた計画を実行したのかもしれない。そのことを告げたら、一はとても不機嫌になった。二人が自分に一言も相談してくれなかったのは水くさいというのだ。実際に二人が今に至るまで、何の連絡も、元氣で生きているというわずかな兆しですら私たちに示してくれないことは、一にとっては堪え難いことだと思う。私だって悲しい。

それでも私は二人の逃避行であってほしいと切に願っている。そうでない可能性について考えるのが怖いのだ。そんなはずはないと思う。あれほどゆりさんを、瑠璃媛を大切にしていた龍王が、そんな恐ろしいことをするはずがないと思いたい。新堂さんだって、ゆりさんと龍王のためにあれほど力を尽くしたのだ。わからない。私にわかることはたった一つだ。二人は一緒にいる。新堂さんはゆりさんの側を離れたりは絶対にしない。

二人は、お産のために竜宮城にいったのだと想像をすることもある。水之江の浦島子のように、わずかな時間をそこで過ごし、それがここではこれほど長い時間が経っているのかもしれないと。ということは私や一がよぼよぼの老夫婦になった頃、ふたりでひょっこりとこの店を訪れるかもしれない。若いままで。

それとも……。私は何十年もしてから、お似合いのとても若いカップルと出会うのかもしれない。龍王や神事などとは縁もなく、夏の休暇のことや車のローンのことなどに頭を悩ませる、なんの変哲もない幸せな夫婦に。

いつの頃からか私は風を感じるようになっていた。龍王の池の前に立つと、どんなに凪いでいても、私の心に不思議な風が流れ込む。出雲へ行くバスに乗り、樋水川を横目で眺める時にも同じ風が吹く。心の中に、たとえようもない歓びがわき上がる。どんなに悲しい時でも、どんなに疲れた時でも、この風は私を癒してゆく。歓喜が声にならない叫びを伝えてくる。至福。この樋水にいることの、愛するものと共にいることの、忘れられない人びとを想うことの。

私は、ここでこの店を続けるだろう。一と二人で。一に出会ったこと、新堂さんとゆりさんと知り合ったこと、この樋水の地にたどり着

いたこと、そして経験した全ての不思議なことは、私の人生にも大きな影響を及ぼした。あの二人みたいに生きたいわけではない。冗談じゃない、絶対に嫌だ。けれど、二人に出会ったことで私は一と平凡に生きる幸せのことを強く考えるようになった。『見える者』として能力を発揮すべきではないかという思いに決別することもできた。ただ『見える』。それだけでいいじゃないかと思えるようになった。

二人がどこかで幸せに生きていることを心から願っている。それが春昌と瑠璃媛だった頃からの二人のただ一つの願いだったのだ。当時から変わらぬ龍王の池の水面のごとく、千年にわたる願いだったのだ。明日は店を閉めて一と夜桜を観に行こう。狂ったように舞い落ちる花びらに水面が乱されたなら、私はもう一度龍王と蛟を目にすることができるかもしれない。

（初出　二〇一一年三月　書き下ろし）